

一つのメルヘン

なかはら
ちゅうや
中原 中也

秋の夜は、はるかの方^{かなた}に、
小石ばかりの、河原があつて、
それに陽^ひは、さらさらと
さらさらと射^さしてゐるのであります。

陽^ひといつても、まるで硃石^{しよせき}か何かのやうで
非常^{ひじょう}な個^こ体^{たい}の粉^{こな}末^{まつ}のやうで、
さればこそ、さらさらと
かすかな音を立ててもゐるのでした。

さて小石の上に、今しも一つの蝶^{てふ}がとまり、

淡^{あは}い、それでゐてくつきりとした
影^{かげ}を落^おとしてゐるのでした。

やがてその蝶^{てふ}がみえなくなると、いつのまにか、
今^ま迄^{まで}流^{なが}れてもゐなかつた川^{かわ}床^{とこ}に、水^{みづ}は
さらさらと、さらさらと流^{なが}れてゐるのであります……

〈出典 『中原中也全集 第1巻』(角川書店、一九六七年)〉

【著者】 中原 中也 (なかはら ちゅうや)

一九〇七(明治四〇)年—一九三七(昭和一二)年
詩人。山口県の生まれ。

【著書】 『山羊の歌』 『在りし日の歌』 など